

ドイツ通信 (II)

大阪大学経済学部 宮本匡章

私の個人的印象記を最初に書き送ってから、早くも2ヶ月が経ってしまった。ボン大学から私に与えられた宿舎も、最初はホテルの一室のように思われたが、今ではさながら自分の住居であるかのごとき愛情がわいてきたし、この宿舎の管理人である老婦人と毎日のように冗談を言い合うようになって、ドイツでの生活が板についてきたようである。私の部屋の中が一間余りもある大きなガラス窓からは、10 cm 余りの雪をかぶった小さな丘と、それを背景とした新築中の家屋が眺められる。これから春になるまでがドイツでの最も暮しにくい時期で、雪とどんより曇った天候が連続するといわれているが、今のところ時々明るい太陽が姿をみせてくれている。しかし、外に出ると、風の冷たさは身に沁みる。大学に行ったり、買物に出掛けるのにまだしばらくは苦勞することであろう。

★★ クリスマスと元旦

12月に入ると、ボンの街はわれわれの目にもはっきりわかるほどに活気をみせてきた。ペートルベンの像のある広場は、クリスマス・ツリーの即席市場に姿を変えるし、百貨店も日本ほどではないが、あざやかな飾りをつけ、人々の購買意欲を高めていた。新聞の報道によると、売上げは予想ほどに伸びなかったようであるが、今年の1月1日から実施される Umsatzsteuer (売上高税) から Mehrwertsteuer (付加価値税と仮に記しておく) への転換による諸物価の値上りが予想されていたため、かなりの盛況であった。特に玩具売場などは買物をするのが大変な位の人出で、いずれの国でも人間生活に大きな差のないことを感じさせる。

大学も12月22日から休みに入り、学生達は帰省や旅行のために次々と姿を消していく。クリスマスには、2~3日間すべての店が閉ってしまうし、レストランすら駅とかホテルのものを除くと休みにってしまう。従って外国人留学生にとっては、この時が一番淋しい、ホーム・シックにかかり易い時期だとされている。幸か不幸か私自身はそんな経験をしないうすんだ。20日には教授のワイン・パーティーに呼ばれ、24日の昼には管理人夫婦の招待をうけ、その夜は日本に15年もいた(しかし日本語は余り通じない) 尼さんから招待をうけるという有様。

しかも夜の11時から、実に簡素な教会(今迄にみた多くの教会は、かなりどぎつい装飾があり、余り良い印象をもっていなかった)でのミサにも参加し、正に文字通り聖なる夜をすごしたのである。25日には、ボンの市内に出てみた。全く人通りがないといってよいほどの静けさで、少なくとも私の経験したボンでのクリスマスは、「静寂」の2字で表現できる。

友人との相談の結果、クリスマスはドイツでやったのだから、元旦はフランスのパリで迎えようということになった。29日から6日間パリ旅行をしたのであるが、詳しいことは別にして、「活気」と「楽しさ」でパリを表現してよいと思う。ゲーテ協会での女の友人がスキー旅行でパリにおらず、再会のチャンスを逃がすという残念なこともあったが、新年を迎えた数時間のパリの印象はなかなか消えそうにない。モンパルナスの某クラブに入ったのが10時半。通常であればショーをやっている時間であるが、その時は皆がダンスを楽しんでいるのみ。丁度零時。すべての電気が消え、お互いにキスをして新年を祝っている。電気がついても名を呼び合い、知人をみつけてはキスをしている。30分後、サン・ミッシェル通りに出ると、夕方と間違える位の多くの人々で道がうまり、若い男達は歌ったりわめきながら、次々と女性にキスを送る。ほとんどの女性が嫌な顔もせずそれらのキスを受けているし、車にのっている連中は、しきりにクラクションを鳴らして新春を祝うという有様で、その陽気さにぎやかさは想像を超えていた。そのあとモンマルトルにも出掛けたが、そこでもほとんど変わりはなく、午前4時頃シャンゼリゼーにあるホテルに帰ってきた時でも、まだかなりの人々が道に出ておりパリの夜の長さを実感した。さて、もう少しまじめな話に移ろう。

★★ ボン大学での講義

ボン大学の講義には、アルバッハ (H. ALBACH) 教授の次の3つに出席しているにすぎない。

一つは、日本でいえば大学院の文献ゼミナールに相当する。助手や博士を目指す学生が一つの論文を紹介し、それについて全員で討議する形式をとる。そこでの印象は次のように要約できる。まず第一に、そこで取扱われるテーマの範囲が極めて広いことで、それを指導しう

る教授の学力には驚かざるをえない。教授に招待されたとき、日本ではなぜ研究を特殊化し狭くするのか、それでは本当の学問がやれないのではないかという苦言を頂戴したことがある。私自身はかなり広い分野に関心をもっている積りであるが、それでも問題にならない。その第二は、アメリカの文献が多く取扱われていることである。しかも、O・R関係の文献が圧倒的に多い。このことはある程度予想してきたことではあったが、ドイツの学問の将来をほぼ予測させることになりはしないだろうか。教授との会話では、アメリカの学問に批判的な態度を窺い知ることができる。しかし、批判的でありながら、なおかつ最新の学問方向を知るため、アメリカの文献を研究せざるをえないところに、ドイツ経営学の現在の姿が浮き彫りにされているように思われる。したがって、私の留学生活での課題も、最近のアメリカの学問が、従来きわだって体系化されていたドイツ経営学のなかに、どのように採り入れられ、それによりどのような成果をあげうるかを、できるかぎり正確に把握することにあると考えている。

第二の講義は Übung と呼ばれるもので、日本ではこれに対応するものがない。それには二時間が与えられているが、前半は教授自身が経営学のある問題（一学期で経営学の全般にわたるように配慮されている）についてのまとめをやる。学士号 (Diplom) をとる時に、口頭試問が課せられるため、その準備であると考えられなくはないが、説明のなかで学生に質問をし、答を訂正しながら、ある問題についての説明を完成させていく。学生のなかには、50才を超えていると思われる男女もおり、自分達の経験からかなり具体的な質問や回答が出て、なかなか面白いものである。後半は助手が経営分析についての解説をやっている。これは、助手の現地訓練とみてよく、説明不足のところや誤ったところにくると、教授が即座に補足や修正をやっている。ここでは電子計算機 (IBM 7090) を利用し、学生がいろいろな実験や分析をすることが加味されている。もちろん、それは授業中に行なわれるものではなく、学生がデータなどを指示し、その結果を次の週に受取るという方式である。教授スタッフと予算の少ない日本では、これらのすべてを実施するわけにはいかないだろうが、教育の実質的な効果を高めるためには、この Übung 方式は考慮してもよい一つの方法であろう。

最後は原価計算の講義である。授業方式には異なるところがないが、教授の説明方法には学ぶべき点が相当にある。主たる点の一つは、記号と数式とによる説明を大胆に採り入れていることであり、その二は、コンテナーメンを実に巧みに活用していることである。わが国

でシステム・アプローチのメリットが認められ、コンピュータの大巾な利用が問題となっているとき、上記の点は正に一考に値するものといわざるをえない。私自身もこのような説明方法を十分に検討してみようと考えている。

今年になって初めての原価計算の講義のとき、教授が「帽子はとった方がよい」と笑いながら注意を与えたので、皆が振り返った席をみると、14・5才の少年が座っている。彼は「はい」といい、帽子をとったところへ、「熱心な若人の出席を心から歓迎する」と言っただけで皆を笑わせた。半時間ばかりたつと、やはり退屈したらしく、席をたった時は、「さよなら」と教授は呼びかけ、彼の姿がみえなくなってから、「まだ理解するには早すぎたようだ」といい大笑いになった。アルバッハ教授はまだ37才の若さだけに、いつも楽しい冗談をいい、学生をひきつけているようである。

★★ 学生の恐怖

私自身、残念ながら、まだ経営学専攻の学生と親友をもっていない。しかし、ドイツ語の勉強のため、男女1人ずつの日本語学の学生と知り合った。日本語とドイツ語の交換教授ということになる。

そのうちの1人が、今年の2月、学士の試験を受けることになっており、猛勉強をやっている。語学専攻とはいえ、私などのドイツ語よりもはるかに立派な日本語をしゃべり、漢字なども相当に知っている学生でありながら、昨年末あたりから目立って神経質になりだした。まず神経性胃病にとりつかれ、それが小康をえている現在、学士試験の口答試問のことが気になり、夜ねむれない時が多いようである。

このような例は、相当に多いようで病院に入院する学生も少なくないという。とにかく、自分の専攻の分野について、何を尋ねられるかわからず、それに対し的確な答えを準備するというは大変なことであろう。このことは、大学生のうち半数ほどの者が学士号がとれないということでも説明がつく。先にもふれたように、ドイツの教授が巾広い正確な知識をもっているのは、当人の努力はもとよりのことであるが、このような試験制度がその基礎にあるものと思われる。日本の学生は、この点に関するかぎり天国のようなものである。

★★ 次信について

昨年末から、新聞紙上で Mehrwertsteuer の実施およびその影響について多くのことが取扱われている。たとえば、Mehrwertsteuer に対する文献の紹介があったり、その税法による物価の動きについてのメーカー側および

以下28頁に続く